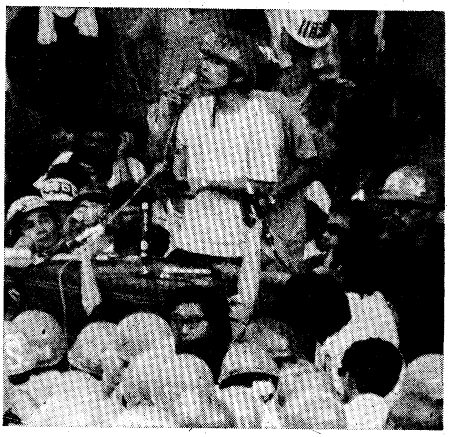
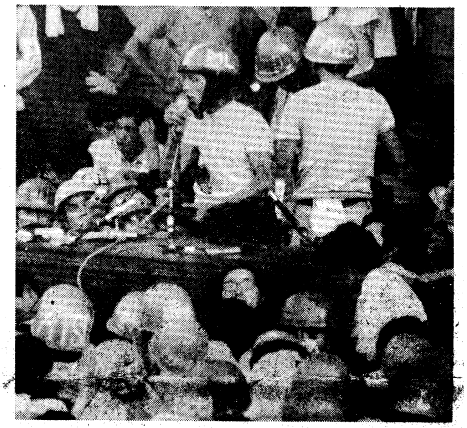
1969.9.25 明治大学新聞

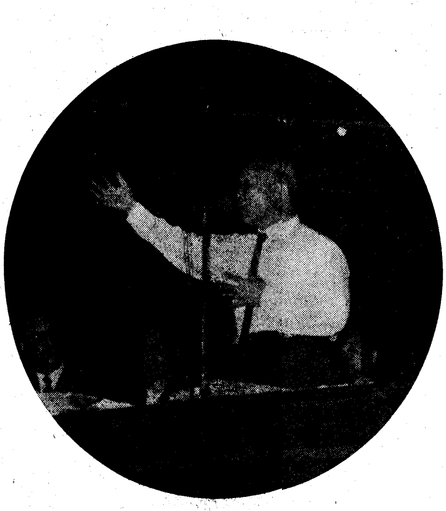
メイダイ・アングル



情熱

何を言っているのか、さっぱりわからない。——如何せん。アジ演説は理解するものではない、感じるものだ。全身からしぼり出す、その声がキカン銃のようにマイクにぶち込まれる。マイクを支える右手の筋肉が、ひと呼吸ごとに引きしまる。全身が硬直する。前後に揺れる。スピーカーから〝論理〟は聴えてはこない。〝情熱〟が勢いよくほとばしるのだ。やがて、熱っぽい空気があたりに充満する。激しいデモンストレーションも、機動隊との衝突もアジテーションがあればこそである。（カット上福田・下本間の両君）



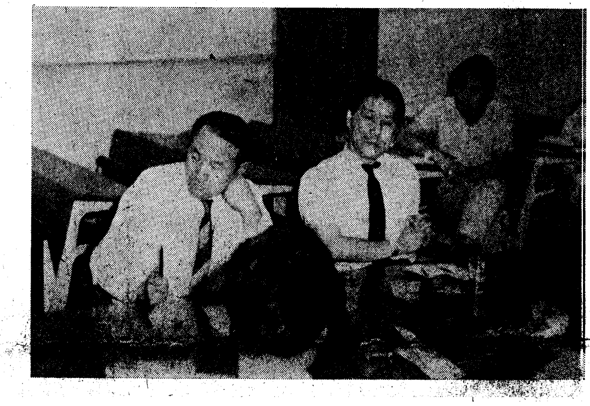


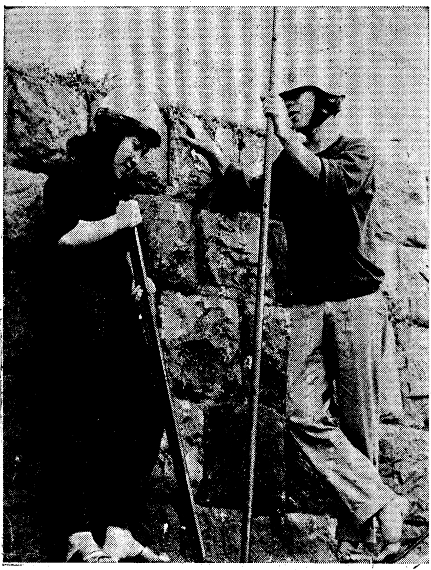
＝雄＝

中川富弥学長はことし年男（とり）の七十二才。とても若々しい。団交では圧倒的若さを誇る全共闘を向こうに回して、堂々と渡り合う。学生がヘルメットで机をたたき、ヤジをとばすと、壇上から「だまって、キキナサイ」と一喝する。〝西の奥田、東の中川〟とはどこかのラク書きにあった言葉。学生に強い学長の〝雄〟ということらしいが、「西の奥田」が倒れた今、「東の中川」は注目の的である。

苦悩

法学部では、五年生卒業試験が問題となり、学生と教授会（**和田英夫法学部長**）がバリケードの中で二度団交を開いた。もともと九月卒業がナンセンスであるため、学生側が「スト中に卒業試験を実施するのは、われわれに対する分断工作だ」と追及すれば、「人情論として、試験を行なわざるを得ない」と答弁する教授の姿には〝苦悩〟の二字が重なって見えた。その後、教授会は八月下旬にリポート試験を実施、約二五〇人を卒業させた。（**左は鈴木教授**）





ひととき

〝女闘士〟——男まさりのゲバ姿を想像してもらっては困る。彼女には〝恥じらい〟があるから。機動隊とぶつかる時、彼女らの主な任務は、男性の後方部隊について、石運びをやること。もう一つは救急箱を抱えて、負傷兵士の応急手当に奔走すること。ヘルメットはかぶるが、めったにゲバ棒を手にすることはない。女性活動家の数は男に比べ、非常に少なく、そのため不断は丁重なおもてなしを受けているようだ。団交の時はもちろん、「イギナーシ」「ナーンセンス」の黄色い声をハリ上げることを忘れない。（**カットは大学院前で**）